

東日本大震災後、福島県南相馬市に住む私の周囲の環境は大きく変わりました。その一つにホームドクターだった医院の閉鎖があります。看護師不足でどうにもならない、というのが理由でした。「被災地に住む者は、どこで医療を受ければ良いのか」。困惑した私はメールマガジンで心情をつづったことがあります。

東北復興日記



▶▶▶ 207

またまた



ベテランママの会代表
番場さち子さん



かけがえのない出会い

テレビをつけても新聞を読んでも、私には本当だと思える情報が手に入らなません。パソコンが不得手で、震災前は事務員に任せっきりにしていた私が、フェイスブックなるものがあると耳にし、パソコンに向かい合うことにしたのです。意を決してフェイスブックに登録。正しい情報を探し始めました。そのころは「南相馬市」と口にしただけで、福島第一原発から三十キロ圏内の私たちはい

はなつてくれないだろう」と疑心暗鬼になっていました。そんな中、愛知県の山中に住み、翻訳の仕事しながら東日本大震災を世界に発信していた中山光正さんという方が、「南相馬市、大丈夫ですか」と友だち第一号になってくれました。中山さんから医療ガバナンス研究所(東京)の上昌広理事長へとつないでいただきました。かけがえのない出会いとなりました。

二〇一二年二月、上理事長や南相馬市立総合病院の金澤幸夫院長らが地域医療を支えようと「南相馬市医療再建会議」を設置。市長らと共に私も委員の一員となり、医師確保や放射線について勉強を始めるきっかけとなりました。

現在、同病院には非常勤を含めて約三十人の医師がいます。写真。昨年末に病院長が亡くなった広野町の高野病院には、ここから多くの医師がボランティアで駆けつけました。

◇

今月と来月は番場さんと、星^{ほし}様大の細田満^{みち}和子副学長の往復書簡の形でお届けします。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。